



日本の養鶏の常識を変えた人

いせ たいちろう
伊勢 多一郎 (1891~1962)

伊勢 多一郎は、明治24年（1891）砺波郡山王村（現 高岡市福岡町）に生まれた。早くに父を亡くし、母の手ひとつで育てられたため、経済的には大変厳しい幼少期を過ごした。しかし、そのような家庭は伊勢家だけではなく、当時の山王村の村人はほとんどが貧しく、多一郎は何とかして村が豊かになり、みんながご飯を食べられる仕事はないか考えていた。当時、村では庭に鶏を5~10羽飼っている家が多かった。多一郎は鶏の数を増やして養鶏をすれば、村が豊かになると考えた。明治45年（1912）21歳の時、多一郎は村をまとめ、山王小学校の前に小屋を作り、村中の鶏を集め養鶏を始めた。まず、村の仲間と「山王村家禽組合」を組織してヒヨコの生産から卵の販売までを一貫して行う体制をつくり上げた。その中で、多一郎は、食用卵のコストダウンを狙うため、卵をたくさん産む鶏をつくり出す育種改良事業に注力し始めた。日本の養鶏は江戸時代に始まったが、養鶏の常識は、「見た目がよい鶏はたくさん卵を産む」というものであった。多一郎は、この常識に疑問をもち、本当にたくさん卵を産む性質を持った鶏を調べ上げ、そうした鶏同士を掛け合わせてさらにたくさん卵を産む鶏をつくる方法を独自に開発していった。

その一つ目の方法が「トラップネスト調査」である。鶏は産気づくと、狭いところに入りこんで産卵に備える習性がある。多一郎はその習性を利用して、鶏舎の中に狭い巣（ネスト）を作り、その中に鶏が入りこむと自動的に戸が閉まる細工（トラップ）を考案した。それまでは鶏を一羽一羽取り上げて、腹に卵を持っているか確認しなければならなかったが、この調査方法を使うことで効率が飛躍的に上がった。

二つ目には、「後代検定」という方法も導入した。掛け合わせた親鳥から生まれた子どもの体型の特徴・産卵成績を一羽一羽記録するもので、調査する子どもの数を増やすことで、産卵能力の高い性質を備えた親鳥をより正確・確実に選び出せるようにした。

三つ目は、「人工ふ化」の方法である。多一郎は、雌鶏が卵を抱いているときに卵を転がしていることに気づき、卵を自動的に転がす伊勢式箱型ふ卵器を完成させるとともに、温度や湿度を管理することでふ化率を劇的に上げることに成功した。これは現代のコンピュータ制御のふ化器にも備えられている技術である。

当時の鶏は多くても年間150個ほどしか卵を産まなかったが、多一郎は誰も行っていなかった最先端の発想と発明で、昭和33年（1958）「三六五卵」をつくり上げた。これは1年365日、毎日卵を産む鶏のことで、世界初の快挙であった。日本養鶏に対する功績が認められ、多一郎は昭和34年（1959）に黄綬褒章を受章した。

こうして実績を積み重ねた多一郎は村のまとめ役として信望を集め、山王村会議員や福岡町会議員を25年勤め、町議会議長まで務めた。

事業も順調に成功し、昭和37年（1962）伊勢養鶏園として、国道8号線沿いに本社を建てることになり、その竣工式のスピーチ原稿を書いている最中に倒れ、この世を去った。71歳であった。その後、多一郎の思いは息子の彦信へと引き継がれ、伊勢養鶏園からイセ株式会社、イセ食品へとつながり、発展していった。

<専門員 星野 貴昭>



後代検定
膨大な戸籍
個体調査用
ファイル



伊勢式箱型
ふ卵器
石油ランプで
温めた